

## マルクスの妖術、ダーウィンの遁辞、無神論の時代錯誤

Greatchain

2020/09/24

BLML（黒人人権運動）の共同創設者だという Patrisse Cullors は、自分を「訓練されたマルクス主義者」だと言い、この運動の一部だとして、この写真のような不気味なダンスを一般公開した。(Sep. 19, 2020, NeonNettle)



これを彼女は witchcraft（魔術）だと称し、その霊たちは BLM 運動に取り入れられるべきものだと言った。

カラーズは、この運動は単に「人種に対する社会的正義」を求めるものでなく、「その中心は霊的運動」であり「霊を呼び出すことによって、その霊たちが現実にあなたに現れるのだ」と言った。

これは、これまで何度も引用した、マルクスの若い頃の詩「絶望者の祈り」で、「俺は、高い所に君臨しているあの者に対して、自分に向って復讐したい」と言っていることに、つながっているだろう。人は一般に、詩で嘘をつくものではないから、これはマルクスの本心の吐露と考えられ、彼は無神論者ではなかった。「復讐」というのは、絶望しながら、その同じ勢いで、神の創った世界を思いきり破壊してやる、ということであろう。ジョージ・ソロスも同じ心境だと思われる。カラーズの呼び出す悪霊にも、同じ意味が込められているだろう。

マルクスは本来そのような人間であった。『共産党宣伝』の最初の言葉、「一つの妖怪がヨーロッパに現れている——共産主義という妖怪が」にも、悪霊を呼び出すかのような調子が現れている。極左マルクス主義と言うべき、反トランプの、ナンシー・ペロシ民主党一派にも、「復讐、絶望、破壊」といった精神が滔々と流れている。それは問答無用であり、理不尽は承知の上での行動である。

もう一つ面白い記事がある。

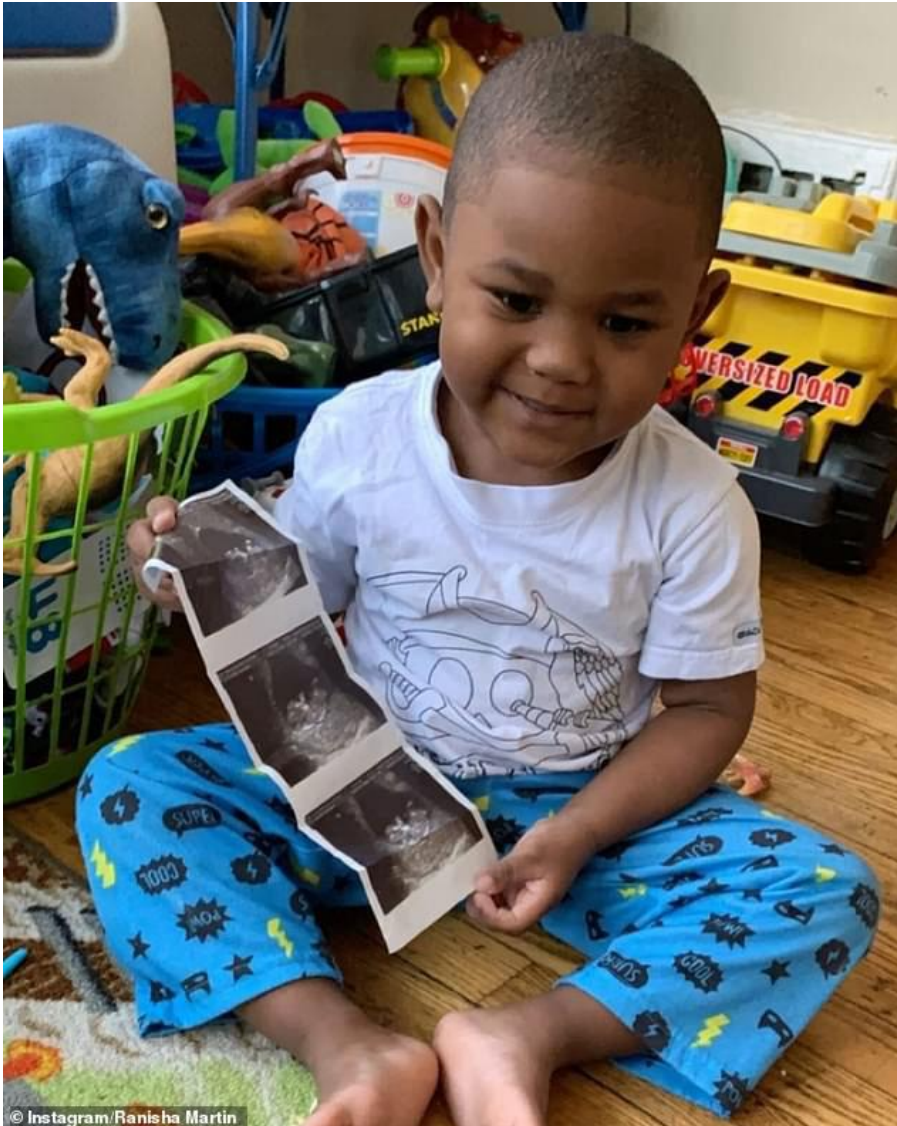
それは3歳児がクラスのランチタイムに、全員をリードして、食べ物に対する感謝の祈りを捧げ、ママが驚いているという話である。(Sep. 21, 2020, NeonNettle)

この心温まる瞬間は、ミズーリ州の Ranisha Martin がビデオに捉えたもので、その息子 Makhi は、クラスのみんとランチを食べる前に、「世界中の男の子と女の子」のために祈った。

このビデオは評判になり、何百万回も視聴された。

「こんなにうまく言えるなんて、本当にこの子には驚いています」と、ママのマーティンは言った。





マッキのママは、彼が、どれだけはっきりと、お祈りを唱えるかを聞いて「ショックだった」と言った。

マッキは、ジェームズ先生とクラスメートをリードし、彼らは彼に従って唱えた。

「父なる神様、私たちはこの食べ物のことを、あなたに感謝します。私たちはあなたがそれを祝福して下さり、私たちの身体の滋養としてくださるようお願いします。世界中の男の子と女の子が、この食べ物を受け取るように祝福してください。」

どういうわけか、このビデオはクリックに反応しないが、これは、母親が息子を何度も訓練し、教えた込んだものではないことは、確かだと思う。

わが国でこういうことが起こるだろうか？ もちろん公立の幼稚園や学校では起こらないが、もし、一般の公立校でこういうことがあった場合、どういう反応が起こるだろうか？ かつて、日教組という左翼団体が、日本の教育を牛耳っていたころ、手を合わせて「いただきます」と唱えることを、宗教教育だとして、反対した人がいた。

今は、そういう無茶な話は聞かなくなった。とはいえ、日本では依然として、切支丹禁制が、輪をかけて行われていることは確かである。それは、「神」や「創造者」という言葉が、公共の場所では、絶対的タブーになっていることからわかる。これは恐るべきことである。神や創造者をタブーとすることは、「人間とは何か」「生命とは何か」を、誰も問わないということ、問うことを禁ずるということである。もし問う場合には、唯物論科学の問題としてのみ、問うことを許される（NHK 教育番組を見よ）。これでは、日本文化が外国から軽蔑されるのは当然である。

私は、そのような軽蔑と言うべきものを、何度か感じている。それはもちろん微妙ではあるが、「議論のできない日本文化が何を言うか」という語気を感じることがある。私の書棚に『哲学者のいない国、日本』という本がある。私はこれを見ると、いつも悔しさを覚え、劣等感に苛まれるが、外国人はそう思っているはずである。せめて、3 歳の子どもが、日常の糧に対して神に感謝を捧げるという事実を、笑いものにすることだけは、やめて欲しいと思う。

せめて、最近ますます盛んに議論されるようになってきた、*The Law of One* という本を、ざっとでも、字幕によって読んでみていただきたい。この「ワン」は神や創造者を意味するものである。存在するもののすべてが、あらゆる部分、あらゆる側面、あらゆる存在次元を含めて、「ひとつ」だということである。それは、つながっているから分割できない。それは whole であって total の全体ではない。しかしそれは、分割できるもの、物的なものとしても、低い次元においては存在できる。それは、笑われながらも、押し通すこともできる・・・こんな簡単な言い方でも、ヒントになり、議論の種になるはずである。あまりにも恥ずかしい、時代錯誤の宇宙解釈に、いつまでもしがみつくなのは、やめておこうではないか。

——以上